桃洞遺筆 第二輯 卷

W391
N3

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』 請求記号 W391-N3

ガラス使用

桃洞遺筆

第二輯

上

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3

ガラス使用

W391
N3

東京帝室博物館
類別 陶器
冊數 參
函號 廿五
大正十一年十一月廿五日許可

東京帝室博物館 印

桃洞遺筆第二輯卷之上目録

明治十五年九月廿日購求

山鷿
一 球蘭
小鹿
一 指石
蜘蛛血石
秋海棠
緬茄
滿天星
荷包牡丹
鱧魚
一年栗
白鴉
萩蘆
石枇杷
竹
籬
蕃椒
附二度栗
三度栗

紀伊 小原八三郎 渭卿 印
源良直藏書之記

国立国会図書館
6.9.21
図書館蔵書

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3

ガラス使用

自然生緑礬　杷
阿通斯　鱗
磁石毛　壁
鬢邊嬌　附十妹妹　十
　　雜蒲
　　魚　附戴帽魚
　　偉魚
　　妹鳥

桃洞遺筆第二輯卷之上

紀伊　小原八三郎源良直　録

山籐（さるとう）

籃筥小牘ヨ盛京通志の山籐ハ類枝蔘柔韌如籐故名土人取爲鞭桿品字箋庚集云桿音敢短杖也又如秤桿之類ヲ今諸國山中ヨ産ヲる黒ガて充り穏當とハふべ〳〵蔓巨きハ木本の如く柔韌ヨ

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

一て至りて強く馬鞭小用ふ葉も似て
小く三葉一處ゝ生を東都まて
いふ此外諸州の方言多〳〵耄筵
小牘ゝ載きハ茲ゝ畧を
ゝ黄絲藤生ス輝縣太一行山山谷中ニ
葉ニ而小ク又似テ蒋ニ枕頭ノ葉ニ頗ル硬ク背
といへるも同物なるべし
直捔そるゟ熊柳ヲ雄鑑口義
弦ともいふやゟ寛正中の人
ゟ軍陳聞書 羣書類聚巻四百十九收之

ゟさ〳〵そへ包一鞭のさ〳〵ら
熊柳ヲ可用ク茵柳ヲハ勝弦
皇后異國退治の御時勝弦ヲ
ほへ〳〵て諸神さ〳〵祝さり
事なり勝弦とハ秘事ゝふゟ
申來るなり二尺八寸ハ廿八
さうとハ(藤)うふなり六寸のう
ゟ掛け緒をほして鞭ヲそ
結ぶ也緒の事ハ二尺八寸ハ

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

建蘗設畏巻ノ四鞭ノ條ニ軍ノ用五木策ノ一熊柳ヘリ黒白藤ニテ巻ク軍陳ニ用フ社參持之ヘリ明ノ王圻ノ續文獻通考巻二十九ノ征榷考雜征中ニ黄藤鞭楫トいへるそれなり形狀といをざれども恐らくハ此魅柳ノ鞭なるべし

荷包牡丹

今人家及花戸ニ多くうゝふ花鬘草ハすなハち花鬘牡丹なり一名魚ヘリ

さゝ呼ふ秘傳花鏡巻五ニ載らる荷包牡丹ハ一名魚児牡丹以テ其葉類レ牡丹ニ花似荷包ニ亦以二月ヲ開因テ是得名ヲ一幹十餘朶纍々相比枝不能勝壓而下垂若倪首然ヒ以次ヲ而開ク色最嬌艶根可分ケ栽若肥多則花更茂テといへる而鮮黄梅雨時亦可扦活

ふて形狀明なり魚児牡丹の名ハ宋の時ゟ呼へる

ゟて格致鏡原巻七十一ニ宋の周必大が魚児牡丹の詩の序を引て得之湘中ニ花紅而莢白狀類鱖魚纍々相比枝不勝壓而下垂葉與牡丹無異亦以二月開といへり又

花卉百種小穿線牡丹ともいふ清の高士奇ノ直按するゟなる朝鮮牡丹ともいふ

苑西集巻五ニ小朝鮮牡丹と題せる詩三首を載せて第一詩の軸子含新蕚荷囊級細枝の句注ニ俗呼為荷

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

明の李君実の六研齋二筆巻三にも此名ありて花卉百種と綿穿の字相及ぶ

包牡丹（ト）といひ第三詩の弱蒂看成（テ）串鮮葩巧合雙の句注よ越中に名線穿牡丹といへり百種と相及ぶ凡清の朱彝尊の日下舊聞巻三十八補遺男昆田輯よ六街花事ヘ引て荷包牡丹（ハ）草本ニ一名朝鮮牡丹花似（テ）僧鞭菊而深紫色其以（テ）ニ牡丹（ノ）ヲ者因（ル）ニ其ノ葉相類（スルニ）也京師槐樹斜街慈仁寺藥王廟花市恒有之といへり或説よ此草本邦へも延寶年中唐山より始めて来るといへども開白ハ延寶年中唐山より始めて来るといへども開白兼良公の尺素往来よ花鬘花と出せるとうれも延寶より二百年餘以前よも猶ありし（ト）ぬ

サクララン
毬蘭

今花姑ヨ多く栽う暖地の産なり其苗藤（ニ）引て枝竿ニ上ルヿ数尺人髭を生ず夏秋の間梢を放く活ル葉の形楕（ヒヅ）よりて鋸歯なく至りて厚く金邊（フクリン）斑（フイリ）葉の種々なり莖ヨ互生（カハル）して莖ヨ一寸許の莖と抽き花ハ数十朵（花ノ大サ三四分）聚まり毬（皆下ヨ向ヒ形俯（ウツ）ムケル物圓花ノ如シ）となり開きて五瓣白色（ニシテ瓣ノ背ニ紅色ノ筋アリ）花謝て苗残り来年其舊蒂ヨも花を生ずる事他草ヨ異なり蘭山翁の説ヨ廣東新語巻二十七ニよ有ニ毬蘭一開テ至ニ五十餘朵一團圓如毬といふヿの是ヨあらんといひ拠もるに績傍墨

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

灣府志（巻十八）ニ番繍毬蒙生葉厚可二一銭一花白色底瓣似二通草一為レ之心微紅而堅明亮如レ攀といへるも同物なるも直云阿部嘉佐の草木育種後編（巻下）ニ毬蘭ニ月記ス灌園草木ニ充テ山本世孺の百品考（巻上）ニも番繍毬識シ出ヲ按ニ閩書南産志（巻上）ニ衮繍毬藤生花一簇数十葉其圓如レ毬初開微二帯一粉紅色一漸尽則白ニ変ズ一といへるも亦櫻蘭なるべし

鱧魚　即七星魚

本草和名（巻十六）醫心方（巻三十）並ニ波年和名鈔（巻十九）ニ波無

と訓ずるより今に至り其誤を来すこと久し　直云新撰字鏡

魚部ニ鯛ヲ太比ト訓セル外ニ鱧ヲ載セテ之ヲ太比ト訓セルハ云ふ迄もなし又和漢三才図會（巻五十）ニ鱧ヲ八ツ目字奈岐ニ充テ川ニモ住ルも真の鱧魚ニ充つる説ヲ非ト故ニ誤まるなり鱧魚ハ和産詳ならず舶来風乾の者塩蔵の者稀ニあり本草啓蒙（巻四十）小具形状ヲ載ま直云平賀源内ハ茲ニ略ス

五ノ風乾鱧魚ノ図ヲ載ク　又享和三癸亥の歳清商孟涵九活鱧魚數尾ヲ齎シ来リ翌文化元甲子の歳東都ニ致ル風乾シテ枯痩セル者ト形色大ニ異なり先年其圖ヲ得テ摸寫ヲ栗本氏の説ト併セ出ヲそこト左の如シ

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

鱧魚真圖

蒙問七星魚有無產于各州縣或止產何處地界等因俱已知悉擬涵所開產地養法俱要覆于左

計開

一產于浙江江蘇合衆太湖之內

一此魚項大者約有四五斤

一此魚可消一切毒症如小兒痘瘄等症前煎湯洒浴出花最輕後食之能復元陽壯力平常日間不能易服

一此魚養須放大魚池內一尾喂養必浮廣渣無文餵頭河泥

一此魚忌服甜酸醎苦并一切油物而木菓中撒攪更甚

安十二月

王局番外舩主函函九

往歲有　命清國商盖浮九者使獻其北地所産之黒鯉乃崎嶇鎮盖肥由豐後守忠英　上進文化甲子六月五日也始儀来十餘頭今存活者七頭時余與尚薬常春院中川先生侍御前賜觀因得審其形狀實是昴平之餘澤千載之奇遇也形長體圓細鱗青黒有斑点花文背腹有鬣連尾而無歧頭尾相等其斑文頗類蝮蛇狀甚可憎全身有涎粘滑難握此鰍魚泥鰍之屬止以花文可觀又有鱗為異耳余按與本草時珍所說相符合可謂殆尽其狀矣此物本邦無産故先輩以相似之魚強誤充之皆非也今也舶来致存活者于東都得始親觀之多年疑惑一旦豁然發明于此余欣抃之餘遂手自寫真秘蓄之頃中川先生請再摹之并孟浮九所筆産地養法一一具録之余不敢辞官暇揮拙毫而應其需且添記其異名一二以贈焉

鰽魚　正字通　一名黒鰽通雅　吳氏本草
音里　食物本草　七星魚
備要本草從新
徐雨具醫滙

文化甲戌三月十三日栗本瑞見法眼源昌澄識

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

小鹿

天明年中伊勢白子領彦兵衛が船神昌丸異國へ漂流の時船人光太夫攜来る處の小鹿一隻乾腊となをの藏めて今我官庫さのり大さ僅二寸半許總身よ鹿紋備り兩角さもさ三岐なりうう全く常の鹿と異ならいこれ西洋中の奇産ものにて人工のをゝるべき物もるゝ清の宋牧仲が筠廊偶筆巻上よ康熙丁未冬余代觀如都謁相國桓郷魏公公飲以荷蘭酒又於坐間見小鹿一隻長二寸許雙角嶄然與犬鹿無異といよ是也

直云百品考巻下よ天保四年蠻舶小鹿二匹ヲ載來ル高サ五六寸常鹿ト異ナルトコロナシ雄ニハ角アリ雌ニハ角ナシ雄ハ長崎ニテ死ス雌ハ大坂へ來リ江戸へ持行シト云フ終ルトコロヲ知ラスせいへり又清の王漁洋が精華録巻四よ云西洋白小牛白質斑文長二尺高一尺七寸項ニ有肉峯と載せより此外鳥獣の類さ小なる者のるゝと居易録池北偶談等さ所さ敢見をゝるへし

一年栗 附二度栗

三度栗

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3

ガラス使用

南海諸州稀ㇾ産ㇾ子生(ミバエ)みしてⅱ其年花實ⅱり高さ二尺許形状常品と同ⅰ按るⅱ唐の劉恂が嶺表録異巻ㇾ廣州ニ無栗惟勒州山中有ㇾ石栗一年ヲ方ニ熟ス皮厚而肉少ㇾ味似ㇾ胡桃仁ニ本草綱目巻ノ廿九時珍所ㇾ引勒字作ㇾ靳字ニ方ニ熟ㇾ有ㇾ圓如ㇾ彈子四字上無ㇾ肉少ㇾ二字熟時或為ㇾ羣鸚鵡啄食畧盡只此石栗亦甚稀少といふをも恐らくハ是ならむ

直云晉の稽含が南方草木状巻下も石栗を載せて花閏三年方ニ結實ヲといふハ土地の異なるⅰ又柱海虞衡志果志嶺南雑記巻下の石栗ハ別物なり○直又云本條の一種ㇾ二度栗三度栗ⅱり二度栗ハ大和ㇾ産ㇾ并河永ノ大和志巻十六山邊郡土産ㇾ剰ハ福住村ニ出一歳再ㇾ結実ヲ呼ヲ曰ニ二度栗といへり三度栗ハ越後信濃上野下野因幡法ㇾ産ㇾ因幡志巻二ノ末ㇾ熊野彩櫛ノ庄芝村。佐ㇾ本ノ庄西栗垣内村。三里郷一本松村等の山中ㇾ出ㇾ名産ㇾ伊豫土佐筑前等ㇾ産ㇾ一名カシハラグリ石見ヤマグリ大和本草ㇾ見ㇾ

一指石

本州熊野四箇(シカノトウ)荘神内(カウチ)村の山中溪澗ㇾ五尺許の圓石

ゆり土人指動石といふ双手もて押動うせハ少しも
動くこと無く指頭をもて撼せハ忽動く頃奇なり石
亭が雲根志後編巻二ニ近江國金勝寺門通り小六七尺
の一指石ゆる事を載せり東海道名所圖會巻二ニ震
嶽といふ此餘諸州ニ捜索せバ猶多かるべし潜確居
類書巻二ニ十七ニ一指石ハ在荊州桐廬長一丈高五尺嶽谷
間ニ以テ手抵之ニ輒チ搖動ス人力多則不能
力可動萬夫莫能移之向上
の下ニ一指石を載せて在桐廬縣西一北四十里長一丈
高五尺以下類書と同文なりとゆるをもれハ荊州ハ嚴州の誤
なり同書巻六十二荊州府の下ニも考ふるに桐廬の地名なし

直云此石ともゆる搖動石ともも名けく清の呉陳琰が
曠園雑志巻下ニ荊州九華頂有千佛寺ニ後半里一石
米粉色縦二丈廣丈有五尺有千佛寺ニ後半里一石
輒ニ動衆推則不動試作語曰我其搖則不動初動
看ニ道光版説鈴日影移處知之次看石知動也然石根
山連血繊雲ニ鳥といひ欽定盤山志巻三ニ搖動石在千
相寺北林木茂密中ニ大若夏屋體圓正承ニ以方石ヲ微ニ撼
之輒動といへり

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

白鴉圖

シラガラス

白鴉

本草啓蒙巻四十五に鴉ノ一種シロフクロフハ略ニテシロフクト云フ松前蝦夷ノ産ナリ羽色白クシテ紫斑點アリ楊弓ノ矢ニ用フトいへり先年摂津東成郡中濱村の樹林中にて獲る者右の圖をるの如し

直云白鴉の一種毛羽白質よりて黄赤紫斑點るをもてシロフクといふ乳赤楊弓の矢に用ふ

握雪窠石　即蜘蛛血石

本草綱目巻十に時珍曰謹按獨孤滔丹房鑑源云握雪窠

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

石出二曲灘澤一盛寒時有二氷凝一生二于石上一可レ采二一分一結レ采十両
又按二南嵓後峒巌神書一云石液即丹礬之脂液也此石出
襄陽曲灘澤中一或在レ山或在レ水色白而粗糯至二冬月一有レ脂
液出一其上一旦則見レ日而伏當二于日未一出時一以二銅刀一刮置レ器
内一火煆過去取出搗汁為レ丸其液沾處便如二鐵色一以液一
銊制二水銀四両一器中火之立乾但此液亦不二多得一乃神理ノ
所レ惜采レ時須レ用二白雞清酒一祭之此石華山嵩山皆出而有
膩液者惟二此曲灘一又然太古巣越集亦言丹山礬十両可
乾汞十両此乃入二格物之精一發二天地之秘一也摠二三書所一引

則握雪礬石乃石之液非二土中石脳一也氣味甘温無毒治
大風瘡ノ蘇恭が土中石脳ノ説玆ニ畧レ之 本草啓蒙巻六ニ握雪礬石ハ詳
ナラズ毒ナシトイフトキハ礬石ノ類ニアラズ石灰
ノ類ナルベシ鼠殺トイフ説ハ甚非ナリトおもいへ
り按ずるに本州那賀郡貴志荘尼寺村の北五町許よ
南北一條の谷ありて登ること二町許大小の白石錯雑
し磊々落々として二百間餘の間を渓澗を夾て連
續せり土人白石谷(シライシタニ)といふ中に陰陽石冠石獅子口石
等方三丈餘ありて或ハ方二丈餘のもの最多し冬月石

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

村江造之也

液其上ニ薫蒸シテ儼ニ丹青ヲ布ルガ如シ俗ニ此ヲ蜘蛛血石（ケイシ）トイフ相傳フ往昔貴志正平（キシノマサヒラ）トイフ者此山ニテ大蜘蛛ヲ殺シ其血忽チ石ヲ染メ今ニ其色変セス血色ナリトイフヲ妄説ナリ予先年ニ度ニ此山ニ遊ヒ土人ノ説ヲ聞ニ毎ニ早晨ニ谷中ニ入テ石上ニ赤キ膏ノ如キヲ見テ湧出ノ又青白ノ二色モ交リニ乱レ石液ニ日光ニ映レハ即時ニ乾ク赤色ハ近日ノ所ニ鉄色ハ経日風霜ニ蒙ルニ従テ変ス此液四時ノ間ニモ冬月殊ニ多シ採ヲ金瘡（キンソウ）戦瘧（センレキ）風瘡ニ

傳ヒハ大ニ効アリ然ニモ山神惜テ妄ニ採ヒハ災ヲ下シ又此石ヲ以テ燧火ヲ作レハ火災アリ故ニ其液ヲ採ルヲ忌ヒ神酒ヲ備ヘテ祭ルトイヘリ此説時珍諸書ヲ引キ来ル説ト符合セレハ梅雪礬石ハ白石谷ノ石液即是ナルヤト疑フベシ或説ニ此液赤色ナルヲ以テ雄黄ナリトイフハ大ナル謬ナリ

直按スルニ南紀名勝志（巻之三）並ニイフ蜘蛛石ハ那賀郡貴志荘北山村（尼寺村ノ隣村ナリ）ノ西北山ノ半腹ニアリ大小数十皆白石ナリ相傳フ昔此山

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

ニ大蜘蛛アリテ往来ノ人ヲ悩ス茲ニ社司貴志正平ト云フモノ此ヲ退治スト蜘蛛ノ骨石トナル也」と又一説ニ坂上田村麻呂退治セラレシヘリ皆妄説ニシテ往昔正平ノ山賊ヲ誅セシ事アルヲ聞キ伝ヘ誤ラルベシ因ニ図ヲ出ス

名公十四世の孫貴志五郎知第の曽孫ニシテ貴志太郎正平といふ安貞年間貴志荘ヲ治メテ利ヲ興シ害ヲ除キ人民皆其徳澤ヲ蒙ルヨシテ土人祠ヲ建テ産土神トシ権大神社トいふ今ハ此荘中の産土神ナリ同荘神戸村の西境内周ニ町餘の中ニアリ

萩蘆竹（ヨシタケ）

筑前○淡竹（ハチク）と和漢同名なり　又アセ（紀伊）と

ヨシダケニ一名ダンチク

いふ暖地の海邊ニ多シ形状蘆（アシ）或ハ荻（オギ）ニ似テ大なり高さ丈許葉ハ蜀黍（タウキビ）ニ似テ長く濶く莖の巨さ大ナル

ハ周圍三寸餘處ニ節ありて竹の如シ畧家ニ植テ竹の籬ヲ栽テ藩籬トス春秋ニ枝ヲ截（キリ）挿テ能活ク筍の味苦シ水ニ浸シ苦味ヲ去リテ食ヒ大和本草巻九ニ鴉醤筍ヲ取テ日ニ曝シ楊梅瘡ノ薬ニ加ヘ用フレハ能毒氣ヲ泄下ス為ニ妙薬ニ味苦寒ナル故ナリ此生竹ノ割テ炭火ノ上ニ渡シ其上ニ炙物（アブリ）ヲ置テアブル火盛ナレ尼

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

竹ヤケズ鉄橋ニ換用フ」トいふ秋
ノ筍譜巻
上ニ秋蘆竹筍其竹似」蘆ニ而
「枝ヲ如」生筍可」食ノ也」といふ是なり
ニ萩蘆竹ヲ作
ル従ふべし

直云清の荘大中が東安縣志
といをされども本條と同物
府志巻十
八ニ蘆竹似」黍生水涯濕處」といへるも亦同
物なり蘆竹ニ同名ノ筍譜ニ萩蘆竹ヲ載テ
別ニ蘆竹ヲ載セラルハ
なり又本草彙言ニ萩蘆竹ノ外
セテ可」以ヲ為ス篪ト」といふハ邦産未考ヘル

四巻ニ蘆萩竹ノ形状
ヲ萩ノ誤
ル秋ハ
ノ筍譜巻十一
ニ卯如」萩蘆冬ニ天不」凋挿ヲ
ヲ按スルニ秋
なり本草彙言巻十一

秋海棠　附白秋海棠

秋海棠　擘ノ芳名ヲ和漢通名ナリ　畧ノ
譜
腸花　名花
譜　爛腸草　三才
圖會　八月春
花鏡　秋傳ノ

ヲ寛永年中中華ヨリ初テ長崎ニ来ルソレヨリ以前
直按スルニ筑前續風土記巻二十八ニ
ハ本邦ニ十シ「秋海棠ハ昔日本ニ
ニ正保年中唐土
ヒ来ル故ニ和名ナシ」といへり二書並ニ貝原氏の
ノ撰ニシテ初メテ秋海棠ノ来ル年ヲ記スルニ二十年
ノ遅速といふ然ルニ本邦東國ノ深山中ニハ自
生ノ秋海棠ノ殊ニ下野ニ安蘇郡粟野邊ニ多シ出流山
ニ多シ是ヲヲヲ正シ寛永年間ニ以前

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

無りしともいひさくいあらし今此草人家庭除ゟ
多く栽て世人の知る處なりしかハ形状といをしく培植の
法い大和本草ゟのり〇又一種白花の者と白秋海棠
といふ清の沈歸愚ゟ國朝詩別裁集巻二十九ゟ尤在京が
詩と載せて曰。誰ゟ将清涙灑幽墀。敬作瑤華別有染。最是
玉人腸断後。淡粧無語背人時。ゟ巻三十朱念裡ゟ詩ゟ
曰。清秋湛露泡瓊芳。素影風揺玉砌旁。旋ゟ夜静看花人独立。
水晶簾外月如霜。直云屈翁山詩集巻八荷研樓詩集ゟ
十ゟも白秋海棠の詩と載せゟり
直云閩小紀巻上ゟ連江鋭髯隠處秋海棠高十丈餘圍可
一二寸許ゟいふ總て此品ゟ限らず暖國ゟそい草
の冬枯ゞして樹となるゟを多ゝ今茲ゟ諸書ゟ載
せゟふ十の一二を擧る事左の如し。南方草木狀
巻上ゟ云交廣草木經ゟ冬不哀ゟ故蔬圃之中種茄宿根有
三五年者漸長枝幹乃成ゟ大樹ゟ毎夏秋盛熟則梯樹採
之ゟ五年後樹老子柿即伐去之別栽嫩者ゟ明の朱國
禎が湧幢小品巻二ゟ云容格之高奇棟高藩之蘭可
杖ゟ清の陳昂ゟ眞黔紀遊雲南ゟ云草麻数十年木
周其本可作梁棟ゟ士人以之播ゟ堂屋ゟ清の王漢洋が

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

香祖筆記巻十ニ云予晉ニ奉使廣州ニ親ニ見草麻樹扁豆樹茄樹昨閲一ニ書言西土甘草亦有成ニ大樹一者上皆異聞也明の錨績り霏雪録云安南國甘草大ニ者如柱土人以テ架ニ屋ノ吾友唐愚士西遊親ニ見レ之ヲ島志巻中ニ云番椒救年不凋後ニ生ス樹トナル

石枇杷

本州熊野海中稀ニ産ス海枇杷ト呼ふ樹ノ高さ二三尺形狀海苔樹ニ似テ一幹五七枝ヲ分ち其幹ハ海苔樹ヨり扁ニ亂海中ニ多クシテ葉ハ小風日ヲ受テ堅クなりて石の如く其色黒くして漆ヲ塗ル如

石枇杷圖

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

一枝の梢ごと小灰赤色の葉一二枚ツヽりて其葉長さ二寸許形全く枇杷葉よく似り頃る奇品なり桜をる桂海虞衡志（金石志）に載る石柏（イシガシ）の属よりて華実珍玩考巻八る石枇杷生海中一枝柯文理儼然（ゲン）真枇杷樹也といふその即是なり

緬茄（ナスビ）

羣芳譜蔬譜二茄附録に明の許伯衡ら滇南雑記を引きて云緬茄出緬甸大而色紫蒂圓整蝸色者佳今會城絶不可得多以小者於蒂上刻人物鳥獣之形殊殺風景滇中

者多〻市之而滇中人亦以此贈遠直云廣羣芳譜巻十七羣の詩を載せて緬甸実如瓜垂金架秋色誰刻紫瓊瑤珍璪投遠客といへり遵生八牋巻十八云緬茄児用以抹眼睚去翳又能解百毒形如木栗上有罩帽如畫皮樣水磨塗治牙疼效此品古渡の物藥店まゝりとゝなりて眼睚を磨きい眼を明るくといふ故ま今眼茄といふ形牛奶茄（ヒトクヂナスビ）の如く大さ七八分圓長方一ゝられた皮い栗ま似て厚く堅くして石の如く一方ま蒂ゟり五瓣まなりて圓整ゝして覆をかぶるの如く故ま上に有罩帽といふ振をふがらゝと鳴

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

る割て中ゝ黄肉と種子とのうち好事の人壓口捺子(ヲシノ)と
ひ草木の別ちなるべからざる
直按そるゝ天野信景(サダカゲ)が鹽尻(巻ニ十一)ゝ蕃茄(眼茄の事なり)
王氏畫苑羣芳譜滇南雜記あとゝなりて年むかし種
名一ゝ二三本生ち一半夏の生ゝちおとろくなり
一の秋の末ゝお枯彷りしこれハ南方の温地なら
てハ長せさふゝやといへり天野氏ハ享保中の人
なり此頃ハ新鮮のをも多く渡りと見えゝり

螯(セミカニ)

怡顔齋介品(巻上)ゝ蝉螯(セミカニ)ゝ載せて江戸ニアリ形蝉ニ似
タリ蝉ヲ倒ニシタルカ如シトいひて漢名と考へず
青木氏の昆陽漫録(巻一)ゝ蟹譜ニ云匡長(ニヲ)而鋭者謂之螯(ハト)
ト先年金澤ノ海ニアリトテ蝉螯ト云モノヲ見タリ
其形螯ノ如ニシテ長シ即螯(ハト)ナリといへり然るへ
按そるゝ此螯南海諸州ゝも産ル介品ゝ圖ゝりそる

蟹譜總論の注ゝ
螯音截(ハクテウケ)となり
滿天星

白丁花ハ今人家檐滴(アマタレ)の下ゝ多く栽る灌木ゝて高

さ數尺に過ぎ葉細小にして密に對生（名ありて種の頭の形の如し）夏月葉間より
小白花を開き形丁香に似たり故に名づく久千葉の
それのり直云近年紫花
のそれのり蘭山先生の十品考に陽春縣
志を引きて云滿天星樹高サ尺餘葉細ニシテ而密ニ開小白花可
以テ栽ル軒檻之前ニ以テ為ス清玩ト即チ花鏡ノ六月雪和名ハク
テウケ九州方言バンテイヒ即滿天星ノ音也といへ
り梅そるに漳州府志（巻三十八）に噴雪花に白小細に雪如
亂點といへるも亦白丁花なるへし〳〵雪柳に噴雪花に
の珍珠花なり
充る説は誤なる

錦葉菜（巻十五丁ノウラニアリ）

直云一説に十品考の滿天星と六月雪と同物とせ
るを誤となし秘傳花鏡に六月雪一名悲茗亦名素
馨といへるに依て素馨の事ならん然ともに花鏡（巻三
六月雪を載せるの外別に（巻五）素馨を載せるをみ
れば悲茗素馨の二名を六月雪の條に誤りて混し
入る者なりかくの如き誤り花鏡中に多し〳〵花卉百
種に六月雪を圖せるを見るに全く白丁花なり又
花暦百詠（巻下）百花賦中に滿天星を載せて注に潑雪
といひ又六月雪を別に出せるにも白丁花の外

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

一種のものとも注なきは何物とも考ふへからず

満天星 ドウダンツツジ

星ハ菊の一種俗ニ一ンギクといふ物なり又唐の帝巨源が食譜ニ満天星を載せて注ニ金米と云ハ果子中の糖糕(コンカウ)なり混ぜべからず

蕃柳(ナンガキ)

唐ガキ一名珊瑚珠十スビともいふ苗の高さ四五尺莖柔弱なり葉ハ艾葉ニ似て大小棟(ヒシ)葉ニ似て毛ありて折ハ悪臭あり夏月葉間ニ五瓣淡黄花を開く花謝して實を結ぶ形酸漿(ホヽヅキ)の殻苞を去るの如く酸漿より大なり熟して赤く食用となる

浸し置て金瘡ニ傅けて住なりといふ大和本草巻九ニ稲若水の説を引きて天茄子ニ充るハ誤なり羣芳譜巻五ニ蕃柳一名六月柳莖似(テ)葛高(サ)四五尺葉似(テ)艾花似(テ)榴一枝結(ス)二五實或ハ三四實一樹ニ三十實縛(テ)作架最堪(ト)観(ミ)火傘火珠未足(ラ)為(ニ)喩(ト)草本也來自西蕃故(ニ)名ト云ふ是なり直(ぢき)ニ湯幢小品巻二十七ニも載せたり此文と大同少異なり

自然生緑蘜

文政紀元戊寅の秋熊野花井荘楊枝谷銅穴中より自然生の緑蘜(ロクハ)を出ル至りて上品なり中ニて大塊の物

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

い高さ一尺五寸許幅二尺餘小巖の形をなして緑色
透明瑠璃の如く観美なり然れども久く風日をそ
ハ外色變化打破きい中の色初の
色變ざるが異なり拠要る小本草綱目巻十蘇恭の
説ゐ緑礬新出窟未見風者正如瑠璃色人以為石膽と
いひ明の宋應星の天工開物にも山陝焼取硫黄山上
甚澤産地二三年後雨水浸淋精液流入溝麓中自然結
成皂礬取而貨用不假煎煉其中色佳者取以混石膽と
いへり唐山よも自然生の緑礬を産ざるをえざるべ

把雜爾（ハサルニ）

享和元年辛酉の夏京師にて蠻舶来のバサルニ名ベ
ソアルを観場に備ふ全形羊に似て高さ三尺許總身
淡黒色にして両角鐵の如く三段に巻揚り物に比し
ずんぐり圖をそえて註をそへ拠をそるみられ難答獣なり
即清の南懷仁の坤輿外紀巻上に渤泥（ボルネオ）國に有獣名把雜爾（バサルニト）
似羊鹿腹内生二一石一療百病極貴重至百換一國王籍一以為
利直云八紘譯史巻二に把雜蘭を作り似羊似鹿腹中
生薬石一能療種々異病價至百換一と載せもり
といへる物にして方観承の松漠草に蒙古西域祈雨

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

把雛雨圖

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3

ガラス使用

太平寰宇記巻一三十風俗通云駝字アリテ訛ハシカラズ

以楂連石浸水中呪之輒験楂連ハ生駝羊腹中ニ団キ者如卵而大者如虎脛在腎似鸚鵡嘴者良色有黄白駝羊有此則漸羸瘠生剖得者尤霊といへる駝羊と同物なり楂連石ハ

鄭玄ノ注ニ詳ナラズトイヘドモ本草啓蒙巻四十六蘭畹摘芳巻三並ニ載セハ証トスルニ賛セヌ直按ニ爾雅釋畜十九ニ云羊角三羭羭郭注ニ云羭角三面音權險音險○許慎ガ説文解字巻四下云羭曲角也従角夷聲徐鍇繫傳巻八ニ云臣鍇按爾雅注羭羖羊也羖音賈反ト又曰羊質而大角縮於首以角之珍軀殘攜手ト注ニ云出吐蕃及威茂州形似羖羊而大具角縮ラ重八九両

黒質而白文可以為帯胯具用亂羅ノ屬ナルベシ

阿遍斯

蝦夷ノ語ニ似ツ又アツシトイフ木ノ皮ヲ織テ布トシテ衣服トセアツシトイヒ松前ニテオヒヤウトイフ直按ニ和訓栞前編巻二ニ蝦夷人ノ衣ヲ以テ神世ノ風俗ノマヽナリ或ハ樹ノ皮ヲ織トイフ是ナリ其名ヨリ別ニ一種ニシテ南部ニテハダノ木トイフ別條ニ詳ナリ先年予日光山中九蔵峠ニテ一株懸崖ニ倒垂スル物ヲ見ル其葉互生シテ形

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

榆(ニレ)葉の如く末三尖或ハ五尖矢車草(ヤクルマサウ)の一葉の如く皮至りて柔靭なり靭を裂きて是を採る皮ハ引て直ち根を逆る其靭なるを以て知べし 漢名未考

直按るに信濃和田峠より産る方言ウバ子レといへるも同物なり一説を以て此木を明一統志の勾芒木を載せて南人績(ウム)為布(ヌノ)といひ粤西偶記に芒と芝と字畫相似(ニタリ)芒布と又宋の祝穆(穆字寰宇記に作ル)が方輿勝覽(巻三十七廣州信安郡ノ土産ノ條ニ見ユ)巻十四を考ふるに梧州府の土産の勾芒木皮可績(ウム)為布(ヌノ)陸川縣(ニ)出(ツ)とい

ガラといふ常
品なり柿なり頭至りて大よ喙長く體の長さ三尺の
ごとく喙の長さ一尺許ありて肉なく硬一完も竹狀筒
の如し直云一種喙
短きものり
短小の鰭ありり又尾と近くして両鰭ありり上下ともに鰭
なし尾ハ小くして岐ありり岐中赤き緑長く出り
肉ハ白色にして味佳なりり俗ニ
噎の病を治ずといふ直按るに今世ニ傳ル毋波康
頼ノ神遺方といへる書三巻の
り中の巻ニ好ノ乃ハ波支ノ牟祢屠治ス流ル毋乃波ガ
中ニ耶波豆を用ふ然ども此書後人の偽撰と見え
て其方も古代の方と思ハれず又和漢三才圖會
巻四十九ニ往ニ試之不ニ必然一
今も亦然り 大和

本草巻十ニ鮹魚を載せて本草ニ見ルニ今關東ニヤ
ガラト云フ魚是乎といへるハ誤なり本草鮹魚の形
状麁なれハ何物とも考へ俗ニタコと訓ずる又院
本などいふ魚ハ俗ニやごらといふ魚まて禁断の
場所へハ必ずより集るゆゑにこのなりて世俗戴
帽魚ととてヤガラの事とこゝろ得ハ稲若水の説
ニて東涯先生の名物六帖動物 東燭譚巻四等ニ出り
然ともに異引處の霏雪録の文ニ安南國ニ有ニ一種魚鋭
首無鱗有骨若ク揮箭ノ然味似ニ河豚一名ニ戴帽魚一

ハヤガラも充のゝ蒲山翁ハ明の遯園居士ゝ魚品續說郛弓四ゝ載しる鱒魚一名火箭喘ゝ充ル此說十二收しゝ

ゝ優さりとして

直云魚品を閲するに有鯸小頭身横視之圓如盤而側甚薄大者曰鰒腹脊多腴有鱒身圓如竹頭尖而喙長俗所名火箭喘也善啗諸魚而品下とゝり鯸の字正字通亥集中ゝ鰒ゝ作り古伯切音格字譜ゝ作鯸といへりまゝ鱒の字諧聲品字箋康熙字典等ゝハ見えず通雅巻四十七魚の下增補字彙正字通並ゝ鰒の下ゝ有鱒俗所名火箭喘也の文ゝよりて音を載せず後世の俗字なるへし

又清の陳鑑ゝ江南魚鮮品檀几叢書初集巻四十八收之ゝハ有鯸魚頭甚小身横視之圓如盤而側甚薄腹有火箭魚亦曰鰒脊多腴有鱒魚身圓如竹頭尖而喙長亦類火箭善啗諸魚而品下とゝり鯸魚ハ勉魚の一名ゝして和名ソシキウヲといふ形状本草綱目ゝ詳ゝ記し廣博物志ゝハ出ゝず陳鑑の說ゝよれバ鯸魚の大なる物を鰒とゝり又火箭喘と鱒とを一物とゝし二段ゝ別てり（ゝ）陳鑑の說ゝよれバ鯸魚の外ゝ鰒を載せて火箭喘と同物とゝし又外ゝ鱒魚を載せて其說ゝもとゞヤガラといへり三段ゝ別てり平按ゝるゝ

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

鮥と鯸とハ別物とするハ誤なるへし火箭鰭と鱗魚と二物と分ハ是非ともあるべからざる故ヤガテよ
鱗の字を用ふるハ害なし。火箭鰭の名頗奇といへ
ども兩説混淆ス渉きハ尚後人の辯を俟のを

磁石毛

證類本草（巻四）ニ蘇頌本草圖經ニ曰磁石其ノ石上（本ノ綱ニ作ル）ハ（始ニ作ル）石中黄赤色其ノ上有細毛（性ノ）温功用更勝
本草啓蒙（巻六）ニ磁石毛ハ（自然ニ）沙鐵ノ附タルモノ久シクシテ褐色ノ毛ノ如キヲ云フといへるハ非なり按るに磁石面上微凹ありて周邊ニ薙漏なる處ハ鐵色深く能鐵ヲ吸ふそれ故ニ此處ヲ鐵椎ヲ以テ數十遍軽く打てハ自然ト紫褐色の細毛自ら生ずるなり磁石毛なり

壁虎魚（クモカニ）

中山傳信錄（巻六）ニ螺殻上生ニ五六ノ肉形（ヲ）如キ壁虎ノ形（ニ）名ニ壁虎魚ト
といふハ非なり蜘蛛介（クモカニ）と呼ふそれあるいて南海中ニ産
ル形狀圖の如く大さ尺許左右ニ曲ル長刺六ツ有
りて蜘蛛の形ヲなせる故ニ名ケしなり殻厚くして黄色ヲ

蜘蛛介圖

流螺圖

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』 請求記号 W391-N3

ガラス使用

裙色の斑点ありて口の内色赤く麗しく又一種同形なり
て六刺ともまた曲られ水の字を似るを火ヨケ介と
いふ

直云又一種同形なりて膚淡褐色と白褐色の斑文
ありて六刺ともまた一方ともの出ると五百介圖ふ
流螺といへり 本草巻西十六ふ海贏一名流螺
といふ和漢同名異物なり

鬢邊嬌 附十妹

清の高士奇が天禄識餘巻上ふ成都古今記を引て載る
錦帶花一名鬢邊嬌 直按ずるに益部方物畧記ふも此
二名ありて津逮秘書中の本鬢ともまた作り説郛中の本鬢ともまた作る諸聲
品字箋丙集ふ鬢同鬢といへり略して鬢嬌ともいへり又海仙花
格致鏡原引杜詩注ふ直云添色芙蓉ふ同名
ふ此名ありて華夷花木考巻四ともまた出り

月花 清俗等の名ありて俗ともまた箱根ウツギ同名
いふ樹の高さ一二丈枝多く繁る葉ハ楊櫨ふ似て毛
茸なく春新葉出て後葉間ふ各一花ありて形風鈴の
如く筒子様ありて先五ツともまた分ち上ともまた向ひて開く初
白色後漸く粉紅色ともまた変じ一日ともまた経て復深紅色ともまた変じ
一枝ともまた紅白交ともまた観て麗しともまた和漢三才圖會巻八ふ
十四

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

錦帯花 ジゲンジ ジゲンジを充るハ誤なり 芫花なり

直云大和本草巻十ニ十姉妹を出して箱根ウツギを充て錦帯花と其下ニ載せて一物とするハ誤なり遵生八牋巻十六 汝南圃史巻八 種画譜 詩譜 其餘明清の世花の事を記せる諸書ニ十姉妹錦帯花と皆別條ニ出せり既ニ秘傳花鏡巻四ニ錦帯花一名髻邊嬌三月間開蒂蕾可愛形如小鈴色内白而外粉紅長枝密花如曳錦帯但艶而不香無子亦有深紅者一樹常開二色有類海棠植於屏籬之間頗堪點綴といひ又同巻ニ十姉妹又名七姉妹花似薔薇而小ク千葉磬口一蒂十花或七花故有此二名色有紅白紫淡紫四様といふまて明らかなり按るニ藝花譜ニ十姉妹花小ク而一蒂十花故ニ名ク其色自一蒂中分紅紫白淡紫四色或云色因開久而変スト有七朶一蒂者名七姉妹一蒂七花者名十姉妹一蒂十花者名十姉妹又名十姉妹花ハ花之命名莫善于此ニ云といひまた清の李笠翁ヶ閑情偶寄巻ノ五ニ十姉妹一蒂十花者曰十姉妹観其浅深紅白確有兄長姉幼之分殆ト堪ト揚一家姉妹現身乎予極ク喜此花ニ種並植棠テ其名ク為十七姉妹の説花鏡を補ふべし

十姉妹七姉妹を通して姉妹花ともいふ清の秦嘉謨ノ干支集錦巻ハ 京都ニ部 ニ撫芳譜を引きて

姉妹花一名庚辛花とハ今花姑ト菩薩イバラと

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

呼ふその即十姉妹なり薔薇の類なりて花の形状
千葉薔薇を似て小さく一房に七八花或は十花許
を着て久く堪ふ初白色なり粉紅色深紅色或は紫
白色に変〻一叢に数色交りて観美なり

十姉妹鳥

本舶来なり今販鳥家に多〻形繍眼児(メジロ)に似て脊及翅
赤色に黒色を帯び腹白色觜菜鳥(ナンバン)に似て小さく淡赤
色脚淡黒色に赤色を帯ふ樊籠に在て能く子を孕
十姉妹を清の俗名といふ出書未考へず

一名ビヤガタスズメ

直捕するに諸声品字箋(千集)に鶺鴒即脊令俗呼為十
姉妹といひ又江村帰田集(巻二)に巧婦(ミソサヽイ)鳥を十姉妹鳥
といひ又格致鏡原(巻八十七)に清の厲鶚(静)の事物異名録
並に雲間郡志を引きて十姉妹名游香俗呼相
思鳥牡牝共呼「飛鳴不散」といひ
なり混をへのらび

桃洞遺筆第二輯巻之上終

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

天蠶絲 附天蠶蟲
蘆鼕
沙蘆箙
貴妃粉
吹上白菊
蛇醫
元寶草
琇瑠
相思子
細馬
榼藤
燕有二物
天狗魚
鱮魚
獅頭柑
竹葉斑石

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

山姥休木　榕

紀伊　小原八三郎源良直　録

天蠶絲（テグス）　附　天蠶蟲

今漁人釣糸（ツリイト）に用ふるテグスもろこしよりくるともバスともいふ漢名天蠶絲　南寧府志　一名天蠶絲　廣東新語　廣東通志　楓絲　粤西偶記　楓蘭絲　本草綱目　蟲絲　圖書編。明一統志　淳州府志

舶來多〳〵其品一ならず大抵ハチモトとヤマトの二名

まて分ち其中より絲の大小色の異なるまて又品名
て分てり千モトを絲圓く中まて十シメと称をる
上品とせや〻を絲微よ扁く稜ありて又サカテグスと
いふあり節の如きをよ着り常のテグスを白根の処本
なりサカテグスを白根の處末なりこれ末より裂け
ハ苧屑の如く成る下品1して其値賤し往昔ハ此テ
グスを何物よりもろしび或ハ海草の莖より或ハ海草
の根より誤の甚しきをよなり其後テグスを焼て鍋
絲の臭氣をあらと明清の諸書に載る説と併せ

考へて蟲絲なる事をあれとも又何の虫より生をる
ことを知らざれハ本邦よ産せざるをよと云昆陽(宝暦癸未の事諸村勘書より)
漫録巻三に南方熱國ノ物ナルベケレ圧種ヲ得テ試メ
キモノ也」といへり漸享和壬戌の年土佐の宮地都藏
維則常毛採薬録を撰して其附録より始めて伯耆の方言
スカシダワラなることといふされど其製法よ不識
して只傳聞のまゝ記せし者なり其文よ曰先年薩州
ノ人琉球ニ在テ糸絲(テグス)ヲ作ルヲ見テ圖シテ帰ル其繭
ハ既ニ繭ヲナス物ハ

絲虫 潜確居類書巻百十七

絲トナラズ其蟲ヲ養ヒ絲ヲ作ラントスル時ヲ候ヒ蟲ヲ煮テ絲トス是ハ琉人ノ極秘ニシテ薩人ニモ知ラレメガル由ヲ聞ケリト按ルニ天蠶ハ蟲ノ名ニシテ絲ノ名ニアラズ

一名。楓蠶 事物紺珠 又名樟蟲 漳州府志。物理小識。直按ルニ廣東新語巻九四小天蠶出陽江其食必ス樟楓葉トいふとられい天蠶ハ總名ニシテ楓葉ヲ食ふヲ楓蠶といひ樟葉ヲ食ふヲ樟蠶ト云ふなり又東安縣志巻四ニも天蠶ヲ載ルる外小沙柳腹中ノ絲亦可作縛トいへるハ廣東新語ニ有沙柳虫腹中ノ絲天蠶ノ属なるべし 今本邦諸國深山ニ多く

ハ栗と漆の二樹ニ産ル又稀ニ楮(カジ)櫧(ブナ)ニ産ル樟(イヌガシ)真餘諸木ニも産ル下野南摩の方言ワリブリツクリといひ

打波 シロコダニ

其傍村の久野及び武藏多摩郡ニてシナンタテウ信濃ニてシナノタテウ大和十津川奥ニて崖椒ヲ生ヲるヲ以て之ヲ山椒太夫といふ又信濃ニてい栗ヲ生ヲるヲ以て之ヲ栗太夫といふ限りて山椒太夫といふ又阿波祖谷(イヤダニ)紀伊熊野及有田郡山保田等の山中ニも産ル(そのあたりとも)シロケムシといふ形蠶の如くホシて長く四月頃虫の大さ二寸五六分許色青く頭と足と紫黒色尻ニ同色の剣ノ如ノ刺リて又食ふ木葉ヲ以て其色種々ニかハり皆長白毛(モウシ)ノ如ノ毛(イラムシ)蟲ノ如ノ而ノて手ヲ捕ふヒとも人ヲ螫さず此虫ヲ養ふヲ以て栗ヲとも漆ヲとも多く植

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

為て四方へ溝を掘り形小なる諸山よりの流れを捕へ来り其樹を放ち〳〵溝あふれば柴外へ遁き去る

最露天さらべし。雄の腹中より糸二條ありて四五月の間殺して糸を出し製造を雲の食ふ葉よりとる糸を採るに大小色ある硬きあり又雄糸は微く痛し又砂も雄は白根多く若ければ白根少く雌は扁なり又雲老きは白根少くともに力弱し宜く中を去るへし糸を採るに大小時を異にする者なり此雲其まゝ養ひ置けば後ち口中より糸を吐き繭を作る長さ二寸許濶さ五六分両頭尖

ホトギスノタムセンナヤウノタツ

り褐色ありて透明なる絲縦横に交斜して羅網の如
（くもりて）
し因幡伯耆および大和にてアミブクロ
越中にてヘチマ信濃美濃にて神ノカラ〳〵出羽に
て山姥ノ袋といふ此外方言猶多かるべし信濃にて
此蘭を正中より横に切て指の先を入れ水田中の艸
を採るに用ふ此蘭にてテヾスを製造する者と誤り思
ふ人多し其製法及異を養ふ法詳なる事は別に録せ
ばこゝに贅せず

相思子

今舶来の相思子は俗に唐アヾキ（多かり）といふ形状本草啓蒙巻三十一に詳なり和産なし喬木にして木理細花雲紋のありて紅黄文をなし甚美なり琵琶槽及扇骨其餘諸器を作りて佳なり物理小識（巻九）に相思木は即ち紅豆樹大者鋸版有花文其近皮數寸無文也南京以作扇邊骨多年數圓者可為書架亦稱雞翅木猶香櫚之呼鸂鶒木也以紋似耳匝斜鋸之其花較顯或以黄紫分称とふべし今三絃鋪を呼ふ舶来の本チヤン真チヤンをはじめ此類なるべし先年京師にて漢種を地より下して生せしもの後はい大樹とな

り其葉合歓葉ヽ似て短くと云ふ今ハ枯をなし又享
和二壬戌の年新渡の相思子を予地ヽ下せしふ五本
苗を生じ皆蔓生ゝして葉ハ馬棘葉の如く莖ヽ互生
し長さ三尺許ヽ至り其冬皆寒ヽ傷らまた枯る浪華よ
て蕭葭堂も此を栽るヽ又然りといふ唐の段公路が
北户録ヽ相思子有蔓生者といふ是なるべし
直按ずるふ廣東新語巻ニ十五ヽも紅豆本名相思子其葉
如梔茨如豆子夏熟珊瑚色大者茨肉微扁其可以飼
鸚鵡者乃蔬屬藤蔓子細如菉豆而朱嘗黒喙其結實
甚繁乃簸落間物無足貴也其木本者樹大數圍結子
肥碩可玩といへるヽ木本藤本の二種ありと
明なり

蘆鰻

本草啓蒙巻四十 鰻鱺魚の下ヽ云一種豆州ノ方言蛇ウ
ナギハ径三寸許長二尺許時ヽ水ヲ出テ草中ヽ居ル
ト云又本州熊野の醫堀宇仙の曰古座川の大ハウナ
ギヽ形常品ヽより巨く大ある物ハ長さ一尺五六寸時
ヽ水を出て蘆荻の中ヽ在りて雑食ゝ物をふ嶺南

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

雑記（巻下）ニ蘆鰻産海邊隨潮登岸ニ食蘆筍潮退入溪田中ニ不能去方ニ可得有重一二十斤者有重五六斤者全似鰻而身短背黒有類烏鱧味極肥美余于憲來縣食之不可常得といへる類なるへし

直按るに小伊豆海島風土記（巻下）に島名カハナゾハ鰻鱺ノ類ナリ谷水ノ落口淪ノ境ニ住ム長二尺餘形泥鰌（ドヂヤウ）ニ似タレ𪜈太キ𪜈周圍五寸許油アリテ味重シ此魚夜陸へ上リ鬼ヲ食ス其跡ヲ慕ヒテ捕ルといふも其屬なるへし又越後にて方言イハナニと呼ふをも此等の屬といふ予以上の四種いまだ見ず

細馬

唐書（巻四十八）百官志三に載る細馬ハ上馬の事なり唐六典（巻十七）に廐令掌繫飼馬牛給養雑畜之事（上）丞為之貳（下）凡象一給二丁細馬一。中馬二。駑馬三。駘牛騾各四。驢及ヒ純犢各六。羊二十。各給一丁といひ又（同巻）凡馬ニ有左右監以別其麤良ヲ以數紀為名而著其簿籍細馬之監稱左廐馬之監稱右といへり本邦にても古ハ細馬の字と

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

用ふ延喜式巻四十八左馬寮ゟ五月六日競馬（クラベウマ）并騎射（ウマユミ）ノ式右當日早朝鞍細馬十疋と見えより直云廐牧令ゟ凡（ソ）廐（ニ）細馬一疋中馬二疋駑馬三疋」義解巻八ゟ謂（ノ）細馬（ハ）者上馬也駑馬（ハ）者下馬也となり按ずるに小細（ハ）細作の細の如く埤雅巻五ゟ良犬（バ）即（チ）今（ノ）細（キ）狗」宋史巻七十四ゟ鷙鳥細犬」醫書類ゟ細墨細酒ちとの細と同く中馬（ハ）本居内遠云信濃松本飯田邊ゟり名古屋へ通ふ高駄馬と今も中馬といひその道ともも中馬街道といへり駑馬（ハ）正字通亥集ゟ駑（ハ）農圃切音弩馬頓劣也凡馬給宮中之役者曰駑といへり

沙蘆蕟（イブキダイコン）

伊吹大根　大和本草　一名鼠大根　同上　辛味大根　ムクロ大根　出雲

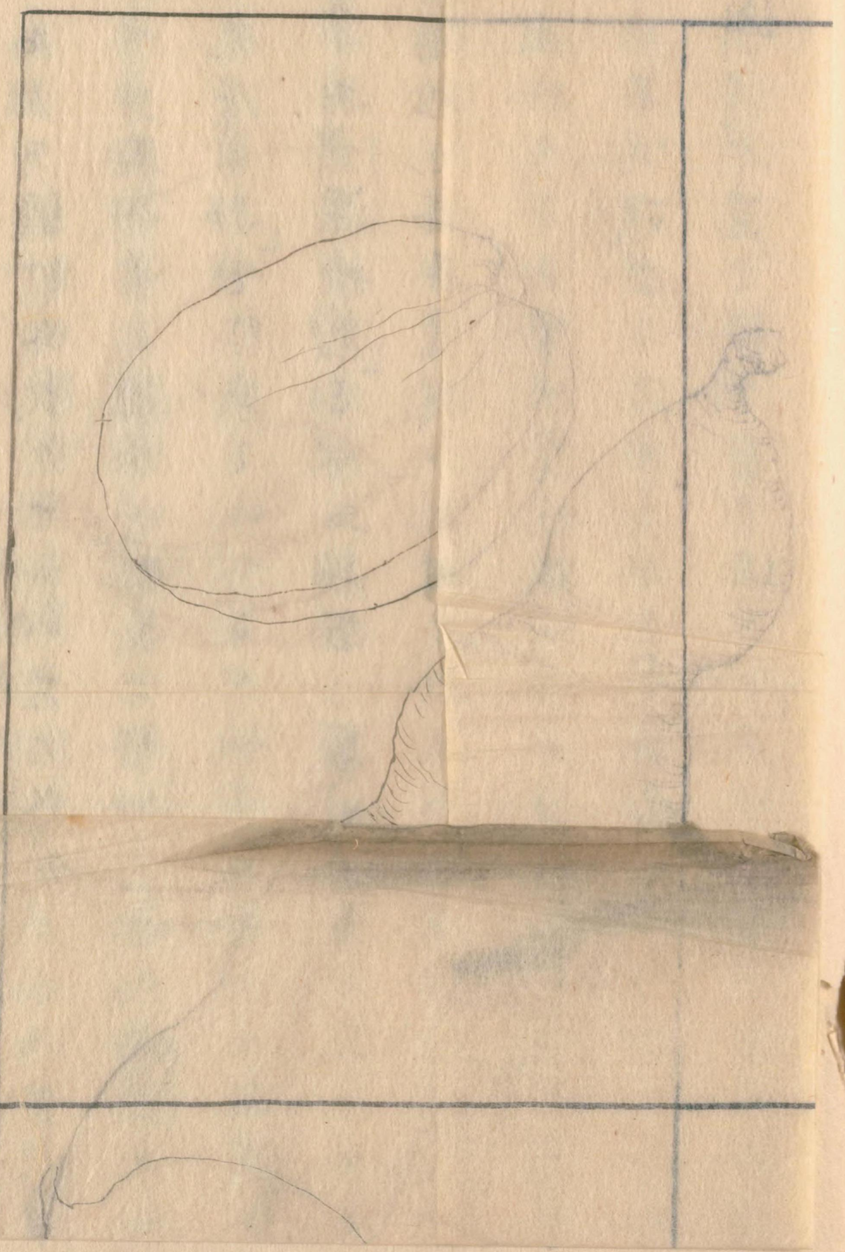
ちと近江伊吹山ゟ自生を今ハ種子を傳へて諸國ゟ栽ゑ六月ゟ種子を蒔き肥糞を用ひそして能生ル苗葉花實常品と同く根の形常品ゟり細く長くして又土地ゟりて形短く肥大なるもあり皆根の先ゟ鼠尾の如く細き尾出つ生食して味甚幸ゟ故ゟ多く粔麺湯餅（ウンドン）の用ゟ供ゟ煮て食へハ味甘ゟ明の金幼孜

の前北征録に有に沙蘆藤根白色大者径寸長二尺許下
支生小者如筋氣味辛辣微苦食之亦作蘆藤氣といふ
その是なり直云明の峨峨山人の譯語に載せる文
同上蓋倉」之以下の七字なし又本草綱目
巻二十六に北征録を
引て沙蘿蔔と作きり

榼藤

榼藤は南方熱國の産にして本邦に産やしく南方艸
木状巻中に榼藤依樹蔓生如通草藤也其子莖黒色一名
象豆三年方熟其殻貯薬歴年不壊生南海鮮諸薬毒と
いへり此子は諸州四邊の海濱へ漂流し来る俗に藤
玉といひ誤認て藻實とする物なり形も圓扁にして質
も敦色にして本草啓蒙巻十四上に詳に載しまた華佗中藏経
巻八に腸風下血に榼藤子皀角子の二味を用ひ其餘唉
痺腫痛五痔脱肛等に榼藤子を用ふる吏本草綱目十巻
八上より詳なり共に畧しく文化二乙丑年二月熊野浦大風
雨のり尾鷲浦邊へ新鮮のそれ多く漂着しが中には莢
をも存する物のり其莢長さ二尺餘幅三寸許形圖の如
一本綱藏器の説に角如弓袋といふ是なり其子を下
種をるに能生しく其藤線稜アリテ絲瓜藤ノ如し葉ハ

橲藤菱子岡



橘藤茨子圖

橘藤苗圖

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

藤菱子岡

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

橘藤茨子岡

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3

ガラス使用

橘藤苗岡

木通（アケビ）葉ニ似テ左右各二ツ四葉一蒂ニメ末二鬚アリテモノニ纏フ年久クナレバ左右各四ニメ八葉一蒂トナル其一葉ノ離セバ形長ク尖リテ南天燭（テンテン）葉ノ如シ光澤アリ」と啓蒙ていへるが如し然きるも此下ま蔓ト共ニ深緑色」いふ此苗ハ蔓及ひ葉の莖ゟも小紫褐色なり其後栽（ウ）るとゝもゟ亦然りて花を異ゟん直捔（モダ）るま草木肯種後編巻下ま象豆羅望子（マニングチモメー）蠻珠等ハ其実礪石（トイレ）まてすり二ヶ處許痂を分て水ま二日許浸し置き横ま盆中植べし」といふ實ま然り其俤ま又裁（ウ）るニハ新鮮の實ま下も生せざるとゝ多し如此ゟれハ急く生ゆ予も三四度植ゑしゟ皆生せり本州まてハ二三年ゟして蔓の長さ四五尺ま至り皆枯る長く育ゐる事能ゎびとゝ孔熟圃の産あれバなり羅望子蠻珠等ハ別條ま録ス

貴妃粉

先年東都濟寿館産物會ま漢名貴妃粉俗称土ノメといふ物出り直云菌類の土栗もまた土ノメといふ同名異物なり産処ハ詳ならびといふ大さ無患子（ムクロジ）許ま白色堀ゟれ外ゟり

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

ゟまた白豆ゟ似て豆ゟゆゑ土ゟ割
みる事をえざれバ其内知べからず蘭齋先生も其席
ゟゆゑを何物ゟも考ふべからず又貴妃粉の名出書
未考へ共といへり予後ゟ廣輿記巻八を閲るゟ陝西
西安府の下ゟ貴妃粉馬嵬坡上白如粉女人面有黒
點者以水和粉洗之即除といへり是ゟ説ゟれバ土
の屑なり予土ヘメの産所及其性質をもふさゝれバ是
非知るべからず博雅の君子ゟ乞ふ
直云淵鑑類函巻三百八十一ゟ貴妃粉を馬嵬土ともいよ
又筠廊偶筆巻上ゟ馬嵬坡有楊妃塚ゟ生白石可爲粉
名貴妃粉ともゝ見えより猶考ふべし

燕有二物

爾雅釋鳥十七ゟ燕々鳧と燕白脰鳥との二條のう燕々鳧
とハ今のツバクラなり燕々といふ古人重言之也と邢
昺が疏ゟいへり燕白脰鳥とハ小爾雅廣鳥篇ゟ白項而
羣飛者謂之燕鳥ト白脰鳥也といへる物ゟて舶来の
り俗ゟコクマルガラスといふ形状慈烏ゟ似て小さ
く翼長く尾短く項ゟり腹下ゟ連なりて白く喉胸ハ

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

黒ツバクラの燕と同名異物なり西河合集経の部
に收むる續詩傳鳥名巻〔巻一ノ卅〕風燕之于飛の條に燕一
名而有二兩鳥一是今燕子説文作二玄鳥一玉篇作乙爾雅作
鳦〔乙〕舜謂是鷾鴳莊子所謂鳥莫二智于鷾鴳一者雖レ復有レ漢
燕越燕胡燕之分然故燕也〔者〕其一是白脰烏小爾雅所
云燕烏者不レ知爾雅何故竟稱作燕而顧野王作二玉篇一亦
因之曰燕乙也又白脰烏也〔ト〕然遍考二他書一自二六經諸子史
籍凡有記述一並無レ有稱燕作白脰烏一者則安有此矣と
いへり朱傳の謂之燕〔ノ〕燕〔ト〕者重言之也の説を駁
て燕〔ト〕者兩燕而重言之也の辨になり繁

冗なるゆゑ略す

直按するに鄭樵ノ爾雅注巻下よ燕白脰烏の烏と烏
と作り即今白頸燕といひ燕ニ乙の下よ此釋レ詩燕
燕于飛文故重言之燕有二二種一前言二白脰燕一知二此為一紫
燕也といひて一類二種一と分てり恐らくハ此説非
ならむ又清の姚彦暉が詩識名解巻一卅風燕ノ條の
下に單ニ燕といへハ白脰烏ニ限り今燕子〔ツバクラ〕を燕ニと
いふに從ひて燕と單称するを誤とし其文よ鳦烏本ト
名燕ニ不レ名燕以二其雙飛往来一遂以二雙声名一之若周々

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

鴝と猩と狒との類最古の書凡三見而語適合此詩及釋鳥文燕に鴝與漢書童謡燕燕尾涎涎と是也餘書省其文多單言之後詞章家習用乳燕海燕之類不知單言燕者乃鳥名釋鳥云燕白腰鳥小爾雅謂之燕鳥鑿然可據則詹以燕と為両燕及曲為重言之説者皆非也といへりこれ一説なれども亦恐らくは偏を渉まり

吹上白菊

八雲御抄巻ゟ九菊萬葉不詠欤寛平菊合以後殊名物といなきより始さりくさといふ」と猶菊を玩ふこと益甚し中ごろも本州吹上の白菊を古歌ゟも多く詠して世人こぞを賞翫て花姑ゟ吹上白菊と呼ぶをもて二種ありと云へり今ゟ至りて一ハ洋菊の中花色白き物なり一ハ俗ゟ小紋菊ゟハヤカゼ草と呼ふをもなり高さ三四尺葉互生して形山椒菊葉ゟ似て長く半ゟ止ゟ粗き鋸歯ありて九月の末莖の梢ゟ單瓣白花聚り開く大さ寸餘形深家ゟ用ふる菊小紋の象ゟ似ゟ故ゟ名けく漢名未考へ按ずるに此二種真の吹上

白菊ふるき古老の傳ふ寶永年間ゝ冷泉家ゟ吹止の白菊を求めらるゝ有徳大君命して只海畔及原野ゝ多く生ずる龍脳菊をもて進せらる冷泉家の説ゝ菅家の詠をもて考ふるゝ必ゟ苑を吹上も龍脳の香ひあり故ゟ龍脳菊とゝふ純和漢通称ゟして

其心黄色ゟり清香殆龍脳ゝ類ゟ又葉を採て嚙ゝ亦龍脳の香ひあり故ゟ龍脳菊とゝふ純和漢通称ゟして

其雛白色其心黄色ゟり清香殆龍脳ゝ類ゟ又葉を採て嚙ゝ亦龍脳の香ひあり故ゟ龍脳菊とゝふ純和漢通称ゟして

其雛小花ゟして

「秋風の吹上にたてる白菊は花うつらぬう浪のを
しるう　素性法師家集ニ題ニ志らけるうと載せり菅公の詠ニ
吹上のきほの白菊は浪のうつるう花のさ
けるうと載せり菅公の詠ニ
をく似たりいふ事まや　又寛平菊合　群書類従巻二
百二十四。左右各十番の歌ありり。左方古手乃菊は。殿
六收ニ
上童は立君を女房にとりて。花ニ折をそかさに
せんをたせたり。いま九本をは。をを房をはとまて
そ忘る。そおもをを房のきほひやるへ〳〵。面白
き所の名をはけつ。菊のはゆひつけり。右方と
き殿上童ちこ藤原重時あをれるおろちけりむ
すこうみて。きくうもれすへきをを房をいとお
ほきはをとりて。ひろめようをゑられいをそいける
にところせう紀伊國吹上濵菊と記せり又夫
菅公の歌出て題ニ紀伊國吹上濵菊の中ニ従三位爲
木和歌抄巻十四　九十九首菊の歌の中ニ従三位爲
家卿の歌「花おひく菊のえをうら白たへおもさと
吹上の濵のおほ風　此外家集。拍玉集。雪玉集。岬
根集等ニも吹上白菊の歌あり
右等の古歌よりれい吹上白菊ハ異なる種なり
てハおく常品の白菊をいふなり

桃洞遺筆 巻之三

天狗魚

一名天狗ボメ　天狗ブカ　以上熊野ニ産ル大ナル物ハ長サ三尋許周圍五六尺頭ハ河豚（イルカ）ノ如ク上唇鼻長ク出ル目至リテ細長ク總身淡黒色ニシテ深黒ノ斑点アリ皮膚ニ至リテ細小ノ沙（サメ）アリ脊ニ鬣アリ又腹ニモアリ尾ハ両岐ニシテ上ノ方長ク下ノ方短シ本州熊野ヨリ東年此魚ヲ捕ル事ヲ禁ズ若シ死ヲ捕ルハ海神崇ヲナストイヒテ甚恐ル安永年中熊野那智荘勝浦村饑饉ニテ止事ヲ得ズ

土人此魚ヲ捕ヘ食フ其味佳ナラズ毒ナシ

直云此魚今ヨリ熊野浦ニテ捕フ性至リテ魯鈍ニシテ人ヲ恐ルヿ無シ漁人初（トリ）綜ヲ刺入ルニハ先ヅ海底ニ沈ム其時綜ノ縄ヲ知ラバ漸ク其痛ヲ知リ海底ヨリ頭ヲ擡ゲ痛ミ堪ヘ兼テ海底ニテ顛倒シテ後ヨハ其縄ヲ身ヨリ纏ヒ死シテ終ニ海上ニ浮ミ出ヅ此ヲ採リテ油ヲトル事鯨ニ同シ又其肉ヲ糕（カマボコ）トナシ伊勢ノ山中ヘ售ル大ニ賤民ノ用ニ利アリ又此頭骨ヲ〻クサラシテ天狗ノ髑髏ナリトイヒテ寺院ノ

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

天狗魚圖

文化九壬申ノ春予ノ友阿加ノ胴山小栗氏
ヨリ亀甲石一塊ヲ贈ル
其磯面ノ孔穴ノ数ノ奇ナリシ事ニ
暗示ヲ得テ其明年ノ夏ヨリ秋ニ
至ル迄ノ間ニ
ヨリ
ヨリ

什物ら〳〵児女の輩を欺くとき是なり又海豚（イルカ）の頭骨なども欺く平賀源内の風来六部集（巻下）に天狗髑髏圖と出せるハ海豚の頭骨を画けるなり又伊勢にて天狗魚と呼ぶ小魚のり形ノボリサシといよ魚に似て大さ三四寸口嘴曲る故に名けく背ホ長鰭のりて張きハ翅の如〳〵本州日高郡にも稀に産にハタガシらともいふ

蛇醫（ヤモリ）

本草綱目（巻四十三）石龍子（トカケ）に集解に出り一名蛇師又蛇舅

妙にも叫ぶ本草啓蒙（巻三十九）に大和本草に載るシヽムシの事とに又一説に石龍子の一種褐色にして痩る者とに二説倶に誤なり直云文海坡沙巻二に在（艸）曰蜥蜴有毒甚於蛇又名蛇醫といふも誤なり蜥蜴ハ石龍子の一名なり

々に産る方言ヤモリ又ヤブドヂヤクと呼ぶ物のり形石龍子に似り短く脊肉肥て青黒色に白斑なり腹白く頭大に尾短く四足五指なり常に草間或ハ竹林中に在りて泥鰌（ドヂヤウ）に似り故にヤブ土長（ドヂヤウ）といふ蘇恭ら説に生山谷一頭大尾小而短（クヒヲ）色青黄或白斑也といふ

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

へるに符合ひ是真の蛇鱓なり真性至りて死しがた
し先年栗本瑞見我 公に告て本國日高奥に蛤蚧の
り方言山モリと呼ふと聞く願くハ活生のそれを賜
らんと乞ふにより命たて日高
山中にこれを捕へしめらる時に二月十三日なり即
ちこれを東都に送り後四月十九日産物會に出るに尤
猶死せずして活動常の如し故に
鱓を誤充つる者なり

鱮魚

明の翁仲仁が痘疹金鏡録巻下
に云鮮鱔攻毒湯治痘出
不快併一切陥伏倒靨鱮魚頭洁者不論
鮮筍尖頭一個丹雄雞頭去毛一個
加生姜五片淡水同煮熟取出令児飲汁時
加酒漿少許児食雞冠并筍餘不用按するに鱮の字
諸の字書に見えず恐らくハ前巻に載る鱧魚一名
七星魚ならん一説に鱏の誤なるん字畫相似よりと
いへ鱏ハ鱣品字箋(集韻息諾)に似鱘而眼獨赤亦作魶と
いへハ鱣の事なり是非ともしらべ
直按するに明の朱濟川が痘疹傳心録巻十五よハ攻

毒湯治二瘡不一易二起發一鱔魚治者不レ論二大小一一箇 丹雄雞頭去レ毛一箇穿
山甲三錢 煅 生姜五片 鮮筍尖頭一両 右水煮熟令二児飲一レ汁ヲ時
加二酒漿一少許ヲ児食二雞冠筍一ヲ
是亦字書ニ見えたり又清の曾香田が瘡疹會通巻四ニ
鮮鱔攻毒湯ヲ載せて鱔魚頭ヲ作り又張氏醫通
巻十五ニも攻毒湯ヲ載て大鱔魚頭ヲ作り注ニ如レ無二鱔魚一
鮹魚頭魷魚代之といへり鱔魚ハ即鱓魚ニして
俗ニウツボと称する物ニ鱔魚頭ヲ此功ある事
諸本草ニ見當らず幼学新書巻十八ニ瘡疹入レ眼ニ生鱔
血點眼良といへる事ハ載り魷魚ハ何魚ニも未
考へず鱓鱔の二字博識の君子ニ質セよ

元寶草（ホトケノホ）

佛ノ座ハ原野ニ多し臘月ヲ苗生ル莖の高さ一尺
餘葉の形積雪草（カキノホシ）葉の如く脚葉（モトハ）ハ莖ヨリ出ル葉ヨハ莖なく其節ニ旋り附ル形恰も蓮座の
如し故ニ名ク尤數層ヲ起せり正月の末ヨリ葉上
毎ニ小紫花裂り開く愛ヲ食べし氣味微ニ辛苦涼ニて
毒なし野人採りて蔬トス食ニ蘭山翁の説ヨ本

桃洞遺筆 巻之五

草從新 巻下 一濕草類ヨ載セタル元寶草ヨ充リ其文ヨ
云辛寒補陰治吐血衄血生江浙田塍間一莖直上葉對
節ニ生如元寶向上或三四層或五六層 直云元宝ハ唐山
なり寶暦年間ヨ清商齎一來リて今通用の銀
る小形紙門の鐶鈕の如く其重さ五十銭或ハ百銭
り佛ノ座の葉の形此通用銀
ヨ似タリ故ヨ名ケタルナラン ○古ヨリ佛ノ座ヨ諸説
のり一説ヨ車前草或ハ芣苢 オホバコ
事ヲ皆誤なり又和爾雅 巻七ヨ臭蒿 黄花蒿の
佛ノ座と訓ジ卷懐食鏡 菜類ヨ雞腸草 タビラコ
氏ハ救荒本草 巻四の風輪菜ヨ充て或説ヨ本草綱目 巻二

清ノ呉中ノ方ノ高百丈位ノ天ニ主雑阿雪隠

十七の生瓜菜ヨ充リ此等ヨ亦誤なり 風輪菜ハ俗称ノ
生瓜菜ハ和産未詳
直云佛ノ座ヨ人日七種菜の一ふして公事根源 上巻
ヨ蘩 ハコベ をこへら芹 セリ 菁 スヒナ 御形 ホトケノザ もこし汎佛の座と出るを
ヨ是なり ⊠拾芥抄 巻下 河海抄 巻十三 壒嚢鈔 巻十一 本朝編
年録 巻三十一 歌林雑木部ニ載ル所ノ説ヨ同 等ヨも出タリ又日本書紀通證 巻十二ヨ七
種菜一説ヨ歌ニ云芹 セリ 薺 ナヅナ 御形 ホトケノザ 蘩蔞 ハコベ 耳菜 ミヽナグサ 草鈴 ハコベ 菜鈴 白昼也 コレヲ
七種 ナヽクサ とのりて佛ノ座ヨ巻耳 ミヽナグサ ヨこゝへるりこれハ正
月七日神道家の供具ヨ佛ノ座の字ヲヲヲ避ケる

なるべし七種菜の事八手春七種考二巻を著して
詳に辨ず

獅頭柑

本州の方言唐九年甫という物なり顕の形大なりて
扁く園一尺許高さ二寸ばかり外皮疵瘡ありて粗
獅頭に類ず冬月外尚緑なりて内已に紅熟す早春に
至り外皮黄色に変じ味香橙に似て更に優れり拗を
るに湔鑑類函巻四百に雲南志を引きて雲南北勝州に有
獅頭柑状如二獅頭一而色黄有二大如一椀者一其味最甘といへ

獅頭柑圖

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

る物恐らくは是なるべし

瑇瑁（タイマイ）

瑇瑁 史記司馬相如傳 又玳瑁 玉篇小作る又瑇瑁の字蝳蝐 文選通引歐陽詢飛白書毒冒 文選加相賦。王莽傳。省字也。前漢地理志師古注曰。毒音代冒。莫内反通作玳瑁 玉篇玳瑁 等と作る一名代尾 卿本草文甲 典籍便覽斑布 水族加恩簿 黠化使者 同上 といふ又東西洋考 五巻と呂宋方言實除雙牙といへり此品舶來と全甲ふ一て徑尺餘の物なり又片々離ちる物もなり今櫛笄及諸器皿と用ふる品是なり 俗と鼈甲と呼ふ誤なり鼈ハスッポンにして其甲首飾の具と造るべき物ふからず又偽造の瑇瑁ハ鵐龜甲牛角番水牛和産ハ角馬蹄等を用ふるこをなり別條と詳と載ゐ

甲の徑四寸許の物寛保三年癸亥の冬十一月加賀宮腰浦ゟ出て真後石見ゟも出ること本草啓蒙 巻四十一 ゟ載ゟり我本州ゟてハ一二寸ゟり四五寸までの物ハ時ゟ漁人の網と罹りて珍とすることなるべし只文化三年丙寅の夏四月七日土佐赤岡浦の海中ゟて漁人の獲ゟるゟ珍とすべし大さ二尺許形狀蠟龜（ミガメ）ふ似て首と喙なり曲りて鸚鵡の喙と類ゐ背甲ハ中五片

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

左右各四庁總て十三庁鱗次をなし蟾龜の只一庁小
りて六角紋ありて水龜甲の如くなるも異なり其甲
淡黒よりて黄を帯び小なる深黒斑ありり裙邊小花の
りて鋸歯様をなし又四足ハ鼈かりて前二ツも長く
二凡後二ツハ短く一凡なり其首と四足と倶く鮭の
りて蛇皮文の如し下甲ハ水龜と同しく黄黒色をて
尾ハ稍短し又八丈島よハ大なる物ありといふ按を
るに桂海虞衡志(異魚志)よ曰蝤蛑形似龜鼈背甲十三
庁黒白斑文相錯鱗差以成一背其邊裙闌齦齒如鋸歯
無足而有四鬣前兩鬣長状如機後兩鬣極短其上皆有
鱗申以四鬣攫水而行海人養以鹽水飼以小鱗俗傳甲
子庚申日輒不食謂之蝤蛑齋日其説甚俚　明の異澠
堂が海槎餘録よ曰玳瑁産于海洋深處其大者不可得
小者時〻有之其地新官到任漁人必獻一二來獻皆小
者耳此物状如龜鼈背負十三葉有文藻即玳瑁也取用
時必倒懸其身用器盛滾醋澆下逐片應手而下但不老
大則其皮薄不堪用耳　此二説本邦よ産する物と
的當せり

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

直按るに指甲十三斤の説をとる〳〵尤本草綱目巻四(二)茅(ノ)条(ニ)も蘆菔詳註巻二十五(ニ)(ノ)字(ヲ)沢(ニ)作(ル)正字通(ニ)も十四斤といふ皆謬なり

竹葉斑石

文化十一年甲戌の春予熊野那智錦濱まて一石を拾ひ得たり其形擂(ヒネリ)まして薄く長さ三寸許其質瑪瑙の如く光澤ありて淡黒の竹葉斑ありて至りて観美なり按るに物理小識(巻七)(ニ)陽信州出(ノ)竹葉斑石皇極殿鋪地是也といへる物恐らくは是なるへし

直按るに格致鏡原(巻三十二)も博物要覧(ニ)云竹葉馬瑙産(ニ)淮右(ニ)色黄有紋如(ニ)竹葉(ノ)一(ニ)作(ル)卓面圖屏といへるも亦同類なるへし

山姚(ヤマヌルデ)ノ休(ヤスメギ)木

深山陰地に産ル殊に熊野有馬荘大馬社の山に多し小木なりて枝幹ともに白色の蝿を塗が如く葉は又山ノ神ノバリタレ木ともいふ

榕

榕 餘封切音容○直云許慎ガ說文解字卷六上ノ案ノ注小松或ハ從ヒ容トナリテ松ノ小窠ヲ松ノ古文ニ〳〵玉篇卷十二ノ重文ニモ誤ナル事正字通庶ノ下ヲ辨セリ廣東新語卷二十五小云榕ハ容ナリ常ニ為ニ大厦ニ以容ル人ヲ能ク庇ニ風雨ヲ又以テ材無ニ所ヲ可ニ用為ニ佇斧ニ正字通ニ榕ハ容ル人ヲ也所ニ容故ニ曰ヒ榕ト自容ホ觚ノ字人ヲ也三小宋志ニ引ニ海物異名記ニ云榕或ハ作ニ槦ニ言ハ材不ニ中ニ梓人ニ也とのり字書ニハ槦ノ音庸楊ノ木中ニ箭笥トいひて榕と同字のこと一名不死木物理小識倒生木通雅倒生樹廣東新語此樹南方草木狀ニ載セテ曰榕樹南海桂中ニ始めて形狀ヲ林多ク植ヘ之ヲ巢如ニ木麻ノ實如ニ冬青ノ樹ノ幹拳曲是不ヲ可ニ以為ニ器ト也其ノ木稜理而深是不ヲ可ニ以為ニ材ト也燒之無ニ焰是不ヲ可ニ以為ニ薪ト也以ニ其ノ不ニ材ヲ故ニ能ク久ク而無ニ傷ル其ノ蔭十畝故ニ人以為ニ息焉而又枝條既繁ニ葉又茂ル細ニ軟條如ニ藤垂ニ下漸ニ及ニ地藤ノ捎入ニ土便生ニ根節ヲ或ハ一大株有ニ根四五處ニ而横枝及ニ鄰樹ノ即チ連理ス南人以為ニ常不ヲ謂ニ之ヲ瑞木ト明ノ凌登名ク榕城ノ隨筆ニ曰閩中多ニ榕樹ヲ因ニ號ニ榕城ト華夷考廣苑詳註並ニ云呼ニ福州ヲ為ニ榕城ト榕樹生ニ至ニ福州ニ而止ム因テ榕ヲ至ニ福州ニ始テ多ク故ニ以名ニ城ト閩部疏ニ云閩以ニ北無ニ此其在ニ江南ニ則冬青之屬也而枝幹柔脆幹既ニ生ニ枝ヲ又生ニ根ヲ垂ニ若ニ流蘇ノ少ニ着ニ物ニ即縈繫或ハ就ニ本幹ニ自相ニ依附ス若ニ七八樹叢生者ハ多至ニ數十百條ニ合并為ニ一蝀ニ蜷ニ結柯葉蔭蔽其ノ偶成ニ章者

重若偃蓋曲若虯龍似亦可観
閩廣最多他省則無故紅梅驛以北無榕大者蔭十餘畝
離奇古怪備木之異衙署多植以為蔭然體曲不中梁柱
理斜不中材用質虚不中薪爨莊子所謂以不材而壽者
也漳浦黄石齋先生有榕頌其木年久者常結伽楠香焚
之致鶴植于水除其子可以肥魚細枝曝乾束為炬風雨
不滅其鬚製藥可以固歯雑記云小兒瘡痂以榕粉一日二傅
之則易脱無痕其脂乳可以貼金接物與漆相似嗚呼人
但知有用之用而不知無用之用也
和産薩摩ノ(国名)ものり
方言アカウ(ユヲヂ)といふ又枕香木(直云江戸花戸の名なる
ものなり)草木育種後編小出
莊北井浦の邊までの間處々ある産ゆ方言オホギノ木
といふ大なるハ高さ數十丈圍數抱葉ハ冬枯まじ
て三月頃新葉生ー舊葉落るなり(直按
に尾張の舎人重巨う草木性譜人の巻小榕を載其葉
せて葉冬凋落ゆ(ユヅリハ)といふハ土地の異なるへし
光沢ありて形冬青葉ゆ似て濶く天仙果(イヅビハ)葉ゆ似て厚く
紋脈異なり莖葉共ゆ断ハ白汁出り七月頃花無く
て本幹及孫枝所を定めじて実を結ぶ形無花果(イチヂク)よ

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』 請求記号 W391-N3
ガラス使用

似て小さく初青緑色小白點ありて熟して紅紫色黄點
を変じ果中も亦無花果の如く味甘し一日高の小児イ
ヤウノミといひ採りて食用とす樹経年の者ハ本幹
及枝上より長細根下垂して又次の枝と着き其着ける
枝より又長細根下垂して又次の枝と着き如此をる
こと幾數ありて根梢地と入て復幾幹を叢生して後ハ
ハ怪状をなす誠と南方の一奇樹なり日高の小児其
根を紐となし玩ぶ四五尺より長き者ハ數丈を至る
直云廣東新語ハ榕之怪在根自上生下語曰榕木倒生ス
根ノ小キ者俗称榕鬚榕水生波千絲萬縷始為鬚中為根
終為幹故幹在中新幹在外表裏
相合状益臃腫可愛也といへり其枝雫雨中ハ挿て旋
活ス其幹大なるハ中空となり質脆して材とならず又
此樹ハ生ずる菌をオホヒギ菌といふ漢となし食ス味
美ふして玉蕈小勝り毒なし直接ずるハ怡顔齋菌品
樹薩州ニ多シ土人アカウノ木蕈類ハ榕蕈連接ニ榕
スアカウナバト名ク西州ノ木ト呼フ此樹ニ菌ヲ生
椎タケニ似テ大也色白ク味美シ生乾共ニ食フ人菌ヲナバト云フ此菌
ベシ但シ久シク蓄フベカラズといふ是なり

直接ずる小大般若経巻五百七十 音釋ハ云榕鉢羅梵語
也樹名佛坐其下成道故又稱菩提樹榕音必 宋の僧
法雲が飜譯名義集巻三ハ云菩提樹西域記云即畢鉢

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

羅樹也 唐の僧法藏り華嚴探玄記 巻三 云ふ畢鉢羅樹此曰榕樹在嶺南亦有此類 八紘譯史 巻二 天竺國物産よ云菩薩樹不花而實人不可食其枝下垂附地生根若柱歳久結成巨林人蔭其下無異屋宇至有容千人者以為佛宇 此等の説さるふ榕樹ハ即佛家の菩提樹なり 又蒙苑詳註 巻三十一 娑羅樹の事 又閩産志巻上 潜確類書 巻 南産志巻二 榮西傳ニ載る物 九十九の菩提樹ハ元亨釋書 巻 と同種ゑして今子と念珠とするなり 又閩書南産志巻上 名異品多シ次編菩提樹の下ニ詳よれ

直又云 大島の方言ガツマルと云ふ物ハ形状大抵榕と同くして高大なり枝幹の根鬚榕より多く生て怪状をなす易し閩書の赤榕なりといふ按るに小閩書南産志 巻上 よ榕有二種一種矮而盤桓其鬚着地復生為樹一名赤榕上聳高大といひ蒙苑詳註 巻三 十よ榕有二種一種矮而盤桓初生于淵鑑類函 引作似 葛蔓二緣木後乃成樹其鬚着地復生為根一種名赤榕最為高大といへり矮而盤桓の物和産未見當らば赤榕ハ本州産の物をガツマルと此文よてハ考へ易し

又奥熊野四箇莊鵜殿村の宮山よ産する花タチバナといふ物も所さりてガツマルといふ花

タチバナ ともも同名
なり別條よ詳なり ○又云環洛異聞 巻十 漂流人(オ)魯
西亞(ロシヤ)都府滞留中の條ゝ漂流人を一日(アルヒ)國王の涼處
といふ處へ遣ハ一見いとゝ船より其廣庭の内ゝ
長さ一町程の棚を架ハ是ゝ纏ひもびおゐハ異木
なりいくりもノ〳〵枝垂をを根となりし松なり
葉ハ樟ゝ似て圓ハ花ハ紫あをて藤豆の如ハ(L)といへ
るを大槻氏南方艸木狀なとゝを引きて榕樹なるべ
きのと載ゝなハ誤なり榕ハ藤豆の如き花なる物
なりゝび本文よりへゝ如く花無きをゝなり廣東
新語ゝも有ハ子無花といへり又性寒を畏きて寒地
ゝ育ゝべき物ゝならん予榕樹録一巻を著ハて唐
山羣籍の説を悉く引載ゝれハ茲ゝ唯其要をいふ
のみ

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』 請求記号 W391-N3

ガラス使用

ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『桃洞遺筆』　請求記号 W391-N3